

## 史料編纂所

I 研究の水準 ..... 研究 21-2

II 質の向上度 ..... 研究 21-4

## I 研究の水準（分析項目ごとの水準及び判断理由）

### 分析項目Ⅰ 研究活動の状況

#### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点1-1「研究活動の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- デジタル媒体による歴史情報について、既所蔵のマイクロフィルム 560 万コマのスキヤニングを完了しており、画像の撮影・管理・運用を一貫してコントロールするシステムの研究やデジタル画像閲覧システム Hi-CAT Plus の開発等を実施し、画像を統一的に管理している。また、第2期中期目標期間（平成 22 年度から平成 27 年度）のデジタル画像による史料収集は 36 万コマを超えている。
- 第2期中期目標期間において、収集と研究に基づく『大日本史料』、『大日本古文書』等の基幹史料集を 58 冊刊行している。
- 国外の機関・研究者との共同研究・交流や研究成果の国外発信を促進しており、第2期中期目標期間において、国際研究集会を 14 件開催しているほか、研究成果を社会に還元するため、一般向けのシンポジウムや講演会等を積極的に行っており、平成 27 年度は 17 件開催し、参加者は約 5,000 人となっている。

観点1-2「共同利用・共同研究の実施状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 第2期中期目標期間においては、特定共同研究は 10 件、一般共同研究の採択課題数は延べ 63 件となっており、平成 27 年度には 87 の機関から 103 名が共同研究員となっている。
- 国外機関、理系を含め歴史学以外の分野の研究者との連携を促進しており、各地に所在する史料の研究資源化を進めている。

以上の状況等及び史料編纂所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

### 分析項目Ⅱ 研究成果の状況

#### 〔判定〕 期待される水準を上回る

#### 〔判断理由〕

観点2-1「研究成果の状況」について、以下の点から「期待される水準を上回る」と判断した。

- 学術面では、特に日本史の細目において卓越した研究成果がある。また、情報学との連携を促進してシンポジウムを実施するなど、異分野連携を促進して

いる。

- 卓越した研究業績として、日本史の「歴史的事象に基づく編年的史料研究」、「古文書・古記録の研究と編纂」、「海外所在日本関係史料の収集と研究」、「日本関係古写真史料の基礎的研究」がある。そのうち「海外所在日本関係史料の収集と研究」については、日本学士院及び国際学士院連合（UAI）との連携事業として5年ごとに UAI の評価を受けており、平成 25 年に Project、Program とともに「優秀」との評価を得ている。
- 特徴的な研究業績として、日本史の「近世政治史料の研究」、「東京大学史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）の高度化」、「正倉院文書の解析支援研究」、「歴史情報学研究」、「イェール大学所蔵日本関連資料の再活用による日本研究の推進」、「倭寇図像の比較研究」、「天皇家（禁裏）・公家文庫の目録学研究」がある。
- 社会面、経済、文化面では、特に日本史の細目において卓越した研究業績がある。また、史料の展示、シンポジウムや講演会等を実施するなど、研究成果の社会還元を努めている。
- 卓越した研究業績として、日本史の「歴史的事象に基づく編年的史料研究」があり、その成果である『大日本史料』は国内外の 300 以上の大学図書館に所蔵され、「大日本史料総合データベース」等のデータベースに搭載・公開しており、歴史史料を整序して社会に提供し共有を可能にすることで、文化・教育上の基盤的認識を形成している。
- 特徴的な研究業績として、日本史の「貴重史料の研究と保全」、「倭寇図像の比較研究」、「日本関係古写真史料の基礎的研究」、「天皇家（禁裏）・公家文庫の目録学研究」、「精密な史料解読の実践とそれに基づく先端的研究の社会的発信」がある。

以上の状況等及び史料編纂所の目的・特徴を勘案の上、総合的に判定した。

なお、史料編纂所の専任教員数は 54 名、提出された研究業績数は 14 件となっている。

学術面では、提出された研究業績 13 件（延べ 26 件）について判定した結果、「SS」は 6 割、「S」は 3 割となっている。

社会、経済、文化面では、提出された研究業績 6 件（延べ 12 件）について判定した結果、「SS」は 6 割、「S」は 4 割となっている。

（※判定の延べ件数とは、1 件の研究業績に対して 2 名の評価者が判定した結果の件数の総和）

## Ⅱ 質の向上度

### 1. 質の向上度

〔判定〕 高い質を維持している

〔判断理由〕

分析項目Ⅰ「研究活動の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 第2期中期目標期間のデジタル画像による史料収集は36万コマを超えており、史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）によって研究資源を公表し、月別アクセス件数は、平成28年1月において25万件を超えている。
- 第2期中期目標期間において、収集と研究に基づく『大日本史料』、『大日本古文書』等の基幹史料集を58冊刊行している。

分析項目Ⅱ「研究成果の状況」における、質の向上の状況は以下のとおりである。

- 海外の諸機関と国際学术交流について、イェール大学（米国）バイネキ稀覯本・手稿図書館所蔵の日本関連資料について調査を実施し、展示・シンポジウムを開催、目録及び報告集を出版しているほか、中国国家博物館と協定を締結し、倭寇凶像の共同研究を実施するなどの取組を行っている。
- 史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）の高度化や、正倉院文書の解析支援研究として、正倉院文書の詳細な目録作成と正倉院文書マルチ支援データベース（SHOMUS）の構築を実施するなど、理系分野を含む異分野連携を推進している。
- 徳川奨励賞、ロドリゲス通事賞、2016 Katharine Kyes Leab and Daniel J. Leab “American Book Prices Current” Exhibition Award 等、国内外における受賞の実績がある。

これらに加え、第1期中期目標期間の現況分析における研究水準の結果も勘案し、総合的に判定した。

### 2. 注目すべき質の向上

- 史料編纂所歴史情報処理システム（SHIPS）の高度化や、正倉院文書の解析支援研究として、正倉院文書の詳細な目録作成と正倉院文書マルチ支援データベース（SHOMUS）の構築を実施するなど、理系分野を含む異分野連携を推進している。